第四回俳句賞「25」

応募作品一覧

・2020年11月25日から同年12月20日にかけて募集いたしました本賞に応募していただいた作品の一覧です。

・応募作品ごとの番号は無作為に割り振られており、審査内容や応募時期とは無関係です。

・「参加者」の欄には、連作に参加した方のお名前（敬称略）と所属高校、学年を記載しています。

・31番『飛べぬ羽』に関しては、参加者から「既発表句が含まれていたため棄権したい」との申し出を受けたため、該当句を伏せた上で作品を掲載させていただいています。

1　静かなる

参加者

尾崎貫太（おざき・かんた、海城高等学校一年）
関友之介（せき・とものすけ、同一年）
田村龍太郎（たむら・りゅうたろう、同一年）
三内洸（みうち・こう、同一年）
南幸佑（みなみ・こうすけ、同一年）

白猫の潜りてゆける椿かな　南幸佑
新宿はひかりの数多受験生　尾崎貫太
宇宙より塵の降り頃水温む　田村龍太郎
長閑さや遊覧船のかたき席　南幸佑
陽炎を横切る魚のやうなもの　南幸佑
父親に似て硬き髪洗ひけり　南幸佑
夏風邪の空が途方もなく深い　田村龍太郎
金蠅や机をどんと手が叩き　田村龍太郎
向日葵の影伸び来たる畳かな　南幸佑
屋根裏の小さき窓や台風来　南幸佑
水澄むや青筋走る掌　関友之介
日の当たる小屋の白塗り葡萄狩　田村龍太郎
案山子翁過ぎゆくものの中にあり　関友之介
防犯カメラは枯木道のみ映し　南幸佑
戦艦のごとき進水おでん種　三内洸
うつむいてなすすべもなし冬茜　三内洸
夙に見る峰よきかたち初比叡　三内洸
一人上がれば双六の紙薄き　南幸佑
あかあかと雪を踏みをる鳩の足　尾崎貫太
残り火の丈比べたる火鉢かな　関友之介
どこまでが夢どこからがヒヤシンス　南幸佑
蝌蚪の尾を透け流れゆく塵芥　南幸佑
卒業子大き袋を抱へけり　南幸佑
野球部のこゑをとほくに桜かな　南幸佑
夏近しジャングルジムに雨しづく　尾崎貫太

2　2020with コロナ

参加者

相川達（あいかわ・とおる、文教大学附属高等学校二年）
徳永彪士（とくなが・あやと、同二年）
逸見光太郎（へんみ・こうたろう、同二年）
高間美緒（たかま・みお、同二年）
天間帆風（てんま・ほのか、同二年）
長谷部凪（はせべ・なぎ、同二年）

春迎え新たな縁に胸おどる　相川達
暖かな太陽よそに家の中　相川達
桜の花人に見られず散ってゆく　相川達
窓見れば居間から遮る姥桜　相川達
扉開け負い目を感じるいま日頃　相川達
マスク付け夏衣着ればみなイケメン　徳永彪士
口元を見せることに恥ずかしさ　徳永彪士
真夏日のマスク登校苦しいな　徳永彪士
予期せぬ敵と変わらぬ町に白き光　徳永彪士
夜の秋終わりを告げる花火かな　長谷部凪
おまつりだみんなワイワイまぼろしだ　逸見光太郎
人に会うそれすら躊躇悲しいかな　逸見光太郎
ささげめし不意に芽生える恋心　逸見光太郎
秋風よそのまま飛ばせご時世も　逸見光太郎
カマキリとハリガネムシは共同体　高間美緒
いくつもの成果を出せず年惜しむ　高間美緒
ブリを釣りさばいてみればアニサキス　高間美緒
咳きこむと集まる視線息詰まる　高間美緒
霜降りて足音響く登下校　天間帆風
神渡しさげすむ風が身を守る　天間帆風
戻るかな顔から布が取れる日々　天間帆風
せまる影さっていくのをしばし待つ　天間帆風
コロナでね距離を感じて悲しいな　長谷部凪
鼻水もマスクで隠れる花粉乙　長谷部凪
昼起きてとりま食べるかインスタント　長谷部凪

参加者

里舘園子（さとだて・そのこ、岩手県立水沢高等学校二年）
高橋咲（たかはし・さき、同二年）
髙橋朱音（たかはし・あやね、同二年）
菅原羽美（すがわら・うみ、同二年）
小野寺羽奈（おのでら・はな、同一年）
阿部なつみ（あべ・なつみ、同一年）

3　往来

アパートの角部屋の鍵秋の空　里舘園子
爽やかや上り列車の過ぎた風　里舘園子
蜩や公衆電話は空っぽ　里舘園子
蜩や絵本袋に解れあり　阿部なつみ
銀杏散る屋根に落ちたる鳥の糞　阿部なつみ
線虫の青き光や冴ゆる月　高橋咲
賢治忌の風車ふわりと回り出す　里舘園子
敬老の日空席多き電車来る　菅原羽美
台風過ぐブルーシートの覆う屋根　里舘園子
小春日や鉄骨のある熊本城　高橋咲
軽トラに仮設トイレや冬霞　髙橋朱音
冬うらら油圧ショベルが動きだす　小野寺羽奈
冷ややかや路上ライブの缶は空　高橋咲
順延のサーカス会場空っ風　髙橋朱音
空っぽのショーウィンドウや十二月　高橋咲
凩や昭和の理髪店の窓　小野寺羽奈
冬浅し広角レンズの歪みかな　小野寺羽奈
冬銀河ブラウン管テレビにひび　菅原羽美
加湿器や缶コーヒーの熱冷める　菅原羽美
空缶の多き袋や冬深し　髙橋朱音
狛犬の皿に集まる寒波かな　髙橋朱音
凍る夜やお湯をいれたるカップ麺　高橋咲
寒禽や片恋なんて認めない　阿部なつみ
我の顔すっとんきょうと言われ鱈　小野寺羽奈
信号の向かいの君の息白し　菅原羽美

4　四季折々

滝のそば負けじと生える春の草　森井蓮
春日和胸が高なる新たな場　宇賀神光希
春風に揺れる黒髪目を惹かれ　小田雪乃
春風と心躍らす愛娘　石峯あやか
移りゆき流れる雲に春惜しむ　鎌田祐輔
晩春や夜が明け待つは夏の日かな　佐藤圭祐
空見上げ静かに流れる雲のみね　森井蓮
夕立に降られ足止め暇つぶし　小田雪乃
目覚めれば響くは疾雷猛々し　鎌田祐輔
夏祭り活気が戻る楽しさを　宇賀神光希
暑き夜やうとましくともあはれかな　佐藤圭祐
遅らせるぺこの速さは蟬の声　石峯あやか
草の下夜の寒さに残る虫　森井蓮
雲鳥居細くたなびく秋の風　石峯あやか
水面に照られ映えられ金木犀　鎌田祐輔
行く秋や揺れる紅葉のはかなきかな　佐藤圭祐
秋雨に濡れる紅葉の露落ちて　小田雪乃
秋澄む日紅葉落ちてく過ぎる日々　宇賀神光希
夕暮の寒さ厳しき秋の声　森井蓮
正月や家族集まる憩いの場　宇賀神光希
身魂に寒さ沁み入る冬旱　鎌田祐輔
帰り道ため息ついて息白し　森井蓮
白息と薄紅に染まる顔　小田雪乃
粕汁の湯気見る時ぞ祖母の愛　石峯あやか
冬の空オリオン座うかぶいとおかし　佐藤圭祐

参加者

森井蓮（もりい・れん、文教大学附属高等学校二年）
鎌田祐輔（かまだ・ゆうすけ、同二年）
佐藤圭祐（さとう・けいすけ、同二年）
石峯あやか（いしみね・あやか、同二年）
宇賀神光希（うがじん・みつき、同二年）
小田雪乃（おだ・ゆきの、同二年）

参加者

谷口なつ（たにぐち・なつ、滋賀県立彦根東高等学校）
佐藤音和（さとう・おとわ、同）
北川夏帆（きたがわ・かほ、同）
宮本萌生（みやもと・めい、同）
山口初詩（やまぐち・はつか、同）
山口初音（やまぐち・はつね、同）
稲元瑛太（いなもと・えいた、同）

5　風懐の音

山頂の風や魚氷に上る朝　宮本萌生
影法師置き去りにして雪解川　山口初音
友と踏むあぜ道どこまでも春　宮本萌生
ミサンガをちぎり春一番に立つ　稲本瑛太
新緑の雨柔らかに墳丘墓　山口初詩
東西に貨車の疾風夏浅し　佐藤音和
チャイムより城の鐘の音青嵐　佐藤音和
あの雲は琵琶湖生まれか夏の風　佐藤音和
新快速青白い灯の熱帯夜　山口初詩
散歩道従兄弟にかざす風鈴草　稲本瑛太
夏茜ふるえる羽に陽を染めて　宮本萌生
追いかける夏の残り陽日々草　山口初音
秋開く「心の琴線」のわた雲　谷口なつ
美容師のはさみの「ジョキリ」秋涼し　北川夏帆
日替わりのピンはブラウン秋麗ら　北川夏帆
空地には車庫にイチジクそよぐ風　谷口なつ
参道の真ん中をゆく秋の空　谷口なつ
運動会塩水につけすぎたリンゴ　北川夏帆
真っ白なバケットハットにぶどう落つ　北川夏帆
七輪の秋刀魚に浮かれ竹刀置く　稲本瑛太
バッタよけ父の自転車の軋み　谷口なつ
なごり陽のぬくもりつかむ通学路　山口初音
模試終えて丸き鉛筆の秋思　山口初詩
白線に色なき風やベース抜け　宮本萌生
葉とともに雀も攫え木枯らしよ　佐藤音和

6　いつも空は

参加者

岡本伊万里（おかもと・いまり、横浜翠嵐高等学校二年）
福田彩月（ふくだ・さつき、同一年）
沖田早和玲（おきた・さわね、同三年）
小林怜子（こばやし・れいこ、同三年）

春光や水筒に傷きらきらと　沖田早和玲
春めきてばちんとギター弦の切れ　沖田早和玲
永き日のイヤホン越しに人の声　小林怜子
木苺の種かみ砕く朝まだき　小林怜子
噴水の水の行く末目で追う子　小林怜子
盆踊りただただ手足滑らせる　福田彩月
半額の打ち上げ花火見て買わず　福田彩月
あの辺りかと語り合う天の川　岡本伊万里
読み返す生徒心得今日の秋　岡本伊万里
秋暑し鉛筆の芯また折れて　岡本伊万里
ブレザーが少し小さし秋気澄む　福田彩月
赤本を積み上げ檸檬頂上に　沖田早和玲
ビー玉の中心草の穂の見ゆる　福田彩月
山ぶどう潰し開店ジュース屋さん　福田彩月
爪立ちて蔦と片手をつなぎたる　福田彩月
初めての槍投げ秋の空高く　岡本伊万里
前ならえ直れ休めよ鰯雲　岡本伊万里
校庭に仲間呼ぶ声秋夕焼　岡本伊万里
満月の方へと一人帰る道　岡本伊万里
日の暮のカーブミラーに残る秋　福田彩月
冬だまた私の知らぬ冬がきた　福田彩月
大縄跳数える声や冬麗　岡本伊万里
回文を口遊みつつ冬うらら　福田彩月
冬ぬくし小さき靴の落し物　岡本伊万里
冬の空飛行機雲が縦に割る　福田彩月

7　押した鍵盤

長閑さや賽銭箱の前に立つ　武元気
春風を受くるボルトに浅き傷　武元気
指先に炎のありし薪能　吉野貴翔
むつごろうの古き巣穴の白さかな　山岸春貴
旗振りの指紋は薄し麦の秋　吉野貴翔
蒜の花や夜勤を終へる父　小倉璃久
メーデーの立ち食ひ蕎麦の匂ひかな　山岸春貴
片蔭に買ひ物袋のみ入れる　遠藤伊代
駅前をぼとりぼとりと夜学生　小倉璃久
コスモスが咲いて柱の軋むかな　本城翔音
キャタピラは遅い九月を踏んでゆく　武元気
月光の身体傾く鼠かな　齊藤嘉大
十六夜や鋼は紅く色づいて　山岸春貴
病棟を移る背中や青蜜柑　遠藤伊代
秋麗に鸚哥の脚の鱗かな　吉野貴翔
稲刈や首のほくろに日の当たる　武元気
いちめんの枯葉の迫る車かな　齊藤嘉大
自転車に浅く座つた冬が来る　小倉璃久
割引のコロッケ買ふや雪催　武元気
作業場の短き布の炬燵かな　齊藤嘉大
医師逝くを告ぐる貼り紙冬の暮　遠藤伊代
初時雨押した鍵盤が戻らぬ　本城翔音
塩鮭の身のぼんやりと温かく　本城翔音
瓶詰の雪やホテルの化粧室　本城翔音
寒椿水面に白き魚の腹　遠藤伊代

参加者

武元気（たけ・げんき、群馬県立高崎高等学校二年）
本城翔音（ほんじょう・かいおん、同二年）
小倉璃久（おぐら・りく、同二年）
吉野貴翔（よしの・たかと、同一年）
山岸春貴（やまぎし・はるき、同一年）
齊藤嘉大（さいとう・よしひろ、同一年）
遠藤伊代（えんどう・いよ、群馬県立高崎女子高等学校二年）

参加者

渡辺優斗（わたなべ・ゆうと、文教大学付属高等学校二年）

山本啓介（やまもと・けいすけ、同二年）

松浦早希（まつうら・さき、同二年）

時乗直也（ときのり・なおや、同二年）

本多彩華（ほんだ・あやか、同二年）

8　春夏秋冬

鴨の子の兄弟たわむる昼下がり　時乗直也

初詣おでんの味が別格だ　山本啓介

勇気出し新たな世界風光る　本多彩華

如月の風に揺れ舞う白い花　渡辺優斗

桜咲く何も出来ずに時過ぎる　松浦早希

花の色移り行くのも朧月　松浦早希

夏が来た触れてく風もぬるくなる　渡辺優斗

夕焼けに練習姿かげうつる　渡辺優斗

山青く風香るけど暑き日かな　松浦早希

炎暑の青小さく灯る赤い花　本多彩華

足元にまばゆい星空うみほたる　時乗直也

夏の昼みんなの家から見える虹　山本啓介

美観地区水面に輝く青柳　時乗直也

爽やかな風浴び歩く夜の道　渡辺優斗

秋の朝となりの木から匂うブナ　山本啓介

またたびの操られること子猫かな　松浦早希

夕焼けに染まる祖父の吊るし柿　時乗直也

青紅葉日頃すぐれば色ふ目路　本多彩華

冬の暮見上げた夕日に淡い月　本多彩華

雪が降り足跡続く雪の道　渡辺優斗

クリスマス子供の欲が大爆発　山本啓介

多の意味でマスクと共に過ごす冬　山本啓介

音もせず寒くなる夜の神無月　松浦早希

焼き芋の湯気にほころぶ子らの頬　時乗直也

凍る空窓にたたずみまもる猫　本多彩華

参加者

大竹莉子（おおたけ・りこ、文教大学付属高等学校二年）
阿部圭吾（あべ・けいご、同二年）
木村航（きむら・こう、同二年）
鈴木裕太（すずき・ゆうた、同二年）
内薗咲良（うちぞの・さくら、同二年）
小林美友（こばやし・みゆ、同二年）

9　きこえる

春の池花びらが散るサラサラと　小林美友
踏切のまだ鳴りやまぬ新学期　大竹莉子
新学期高まる鼓動に深呼吸　木村航
空き缶もカラカラコロン春祭り　内薗咲良
汗ぬぐい暑いと笑う友の声　木村航
ピアノの音反抗期かな梅雨寒夜　内薗咲良
胸躍る祭囃子と下駄の音　大竹莉子
水遊びはしゃぐ子供を眺めつつ　木村航
ダイビングザバッと潜る宇宙人　鈴木裕太
蟬時雨負けじと部活の声がする　大竹莉子
つくつくし今年も夏にご挨拶　内薗咲良
麦わら帽中に広がる波の音　大竹莉子
扇風機今年は少し風邪気味だ　阿部圭吾
ぼんぼりの照らす笑顔夏祭り　小林美友
蟬が見る七日目に見る走馬灯　阿部圭吾
夏過ぎて残暑を打ち消す虫の声　鈴木裕太
秋告げるきりぎりすの声キリキリと　内薗咲良
のど自慢マツムシスズムシ大合唱　阿部圭吾
はらはらと静かに落つる赤紅葉　阿部圭吾
帰り道枯れ草踏む音快き　木村航
試験中教室に響くペンの音　鈴木裕太
寒いから目覚まし時計聞こえない　大竹莉子
雪を踏む着ぶくれ姿愛おしい　小林美友
年末は紅白つけよう歌声で　鈴木裕太
除夜の鐘澄んだ夜に鳴り響く　大竹莉子

10　音

参加者

小山紘輝（こやま・ひろき、長野県屋代高等学校二年）
口丸和未（むちまる・なごみ、同一年）
合津弘菜（ごうづ・ひろな、同一年）
村田いぶき（むらた・いぶき、同一年）

強がってコンビニ雷までの距離　合津弘菜
夕立やヒーローのごと髪濡らし　口丸和未
人混みに好きの一言花火の夜　口丸和未
風鈴の真下に富士の高嶺かな　口丸和未
二重虹ひとつ多めに角砂糖　合津弘菜
捨て犬の眼に映りたる大花火　合津弘菜
夕立の引退試合一点差　合津弘菜
風鈴の金魚青空泳ぎけり　合津弘菜
渋谷ハロウィン十六夜の月出でて　口丸和未
割れたる柘榴戦争を語る祖父　合津弘菜
静寂と闇を生み出す天の川　合津弘菜
終電のテールランプや秋深し　小山紘輝
歩み遅き祖母の手を引く花野かな　村田いぶき
林檎収穫ラジオを枝に掛けて　村田いぶき
クリスマスチキン貪る親子猫　口丸和未
自転車の轍楽しげ霜柱　口丸和未
寒鯉の濠に潜める城下町　口丸和未
家々凍てて地域清掃の朝　村田いぶき
風花や古き友よりエアメール　小山紘輝
先頭を争って踏む霜柱　村田いぶき
失恋を吐き出すつもりシャボン玉　合津弘菜
春寒や出窓に鳥のぶつかりて　小山紘輝
春泥の真ん中を行く反抗期　村田いぶき
新しく幼稚園建つ百千鳥　小山紘輝
化粧品売り場賑はふ花曇　小山紘輝

11　小舟

参加者

野城知里（のしろ・ちさと、星野高等学校三年）
磯部美咲（いそべ・みさき、同三年）
小久保羽琉（こくぼ・うるる、同三年）
高木里緒（たかぎ・りお、同三年）

助手席を倒し春三日月に雲　野城知里
子を宿す猫の波打つ腹と寝る　野城知里
ひらがなの羅列の春の光めく　高木里緒
かさぶたを剝がして雨のねぢあやめ　小久保羽琉
五日目の日記を開き雛あられ　高木里緒
消火器に無数のへこみ啄木忌　磯部美咲
細き手に揚羽の時を奪はせり　高木里緒
母の日の空と水たまりを踏みぬ　小久保羽琉
参考書きつく束ねて五月晴　野城知里
負け終へて掬ぶ泉を揺らすこゑ　野城知里
教会にひらくオリーブ風を待つ　磯部美咲
どの嘘も甘やかなりて海開き　野城知里
降る光飛魚の背の深さまで　野城知里
長き夜や瓶に小舟を育みぬ　野城知里
ケチャップを振り下ろすたび秋思かな　小久保羽琉
竜胆の湧き立つ墓に名の太し　野城知里
野分雲パスタの鍋を噴きこぼす　野城知里
秋蒔の人差し指の長くあり　小久保羽琉
こんにやくを手綱に結び律の風　野城知里
神渡しカップ麺食ふまでの歌　磯部美咲
綿虫や仮設トイレのドアかたし　野城知里
紙漉の匂ひ喩ふるために嗅ぐ　小久保羽琉
三寒四温夜を待つ体温　野城知里
枯野道はちみつ飴の溶けてゆく　磯部美咲
冬の梅ほころぶ街よ幾星霜　野城知里

12 こちらキッチン探検隊

参加者

平こころ（たいら・こころ、青森県立八戸高等学校二年）
菅原雅人（すがわら・まさと、同二年）
安田浩志（やすだ・こうし、同二年）
松岡輝和（まつおか・てるかず、同二年）
高島明日香（たかしま・あすか、同二年）
大久保美咲（おおくぼ・みさき、同二年）

十七の春愁サイフォンのしずく　松岡輝和
春雨や酢飯の味見もそもそと　大久保美咲
ガスコンロの火は小さめに楓の芽　高島明日香
花冷えや中国茶器をゆく駱駝　平こころ
サバ缶が四つ遅日のパントリー　松岡輝和
紙パックかわき春夕焼うるむ　菅原雅人
丁字草挿すピーラーの右どなり　平こころ
フライパンの蓋すっと立つ白桜忌　菅原雅人
ミキサーのプラグの歪み蟬生る　高島明日香
くちなしの花や令和のレシピ本　菅原雅人
夏雲を吸って膨らみゆくニョッキ　松岡輝和
取れかけのラップそのまま祭笛　大久保美咲
卵焼きの巻き方ゆるい今朝の秋　大久保美咲
終戦日の空になきだす薬罐かな　安田浩志
岩塩の割れ目はピンク小鳥来る　菅原雅人
星月夜ハウルの城にＩＨ　安田浩志
ペアグラス乾いて百舌鳥の声一つ　安田浩志
揚げ油かためる父の夜長かな　高島明日香
勤労感謝の日炊飯器は空っぽに　安田浩志
固まった砂糖ほぐせば冬かもめ　大久保美咲
シンクには磯の香かすか冬の朝　菅原雅人
ホイッパーの柄に赤錆や冬薔薇　松岡輝和
出汁の香のしみたミトンや冬銀河　平こころ
成人の日やまな板に浅い傷　平こころ
チョコ溶かす温度はぬるめ寒椿　高島明日香

13　学生の四季

参加者

神山要（かみやま・かなめ、文教大学付属高等学校二年）
河野佑亮（こうの・ゆうすけ、同二年）
榊原理央（さかきばら・りお、同二年）
鹿山結（かやま・ゆい、同二年）
清水響子（しみず・きょうこ、同二年）
中谷心美（なかたに・ことみ、同二年）

花吹雪やわらかな風浅き春　神山要
新学期笑みがこぼれる貴方いる　中谷心美
春の陽におぼろげに聞く友の声　鹿山結
土筆生え春の終焉肌湿る　榊原理央
葉桜と惜しむがすぐにすぐ青葉　鹿山結
ラントレで意識朦朧日の盛り　河野佑亮
体操着白き背中に陽は映える　鹿山結
汗光る頑張る君にポカリ渡す　中谷心美
空の青頬を伝うは汗と涙　神山要
屋上で君は密かにベガを見る　清水響子
アロハシャツ袖から見える日焼け跡　榊原理央
垣根越え金木犀の香りする　清水響子
通学路葉の色変わる秋の気配　河野佑亮
いつからか君と目が合う秋学期　中谷心美
赤や黄の生の炎色山化粧　神山要
紅葉散り肌寒き夜突然に　榊原理央
木枯らしと同じく乾く胸の内　鹿山結
曇り空白い吐息冬が来た　神山要
霜柱踏んで歩く通学路　河野佑亮
近づきたいマスクの君とディスタンス　中谷心美
雪が降る今年最後の登校日　清水響子
登下校重ね着しないと寒すぎる　榊原理央
夜更けどともる灯りとわが闘志　鹿山結
桜散り空の教室喪失感　清水響子
めくりめくわが思ひ出と桜の木　鹿山結

14　星の図鑑

参加者

垂水文弥（たるみ・ふみや、開成高等学校二年）
重田渉（しげた・わたる、同二年）
佐伯冴人（さえき・さえと、同一年）
佐々木啄実（ささき・たくみ、同一年）
谷田部慶太（やたべ・けいた、同一年）

あはき雪濃き雪のあり初詣　佐伯冴人
山眠る髪のかわいてゆく匂ひ　佐々木啄実
温室が欠伸のやうに続きけり　垂水文弥
空き瓶のうすぐもりより蝶生まる　谷田部慶太
春雷や買はぬつもりのペン試し　垂水文弥
大いなる闇あり女王蜂と呼ぶ　谷田部慶太
はるかなるもの束ねんと風船売　谷田部慶太
知らぬ草ふたすぢ混じるうまごやし　谷田部慶太
聖五月羽のごとくに茶葉沈み　谷田部慶太
鉛筆は刃に痩せて椎の花　垂水文弥
自画像に髭すこし足す青嵐　佐伯冴人
蚊帳の中星の図鑑をたづさへて　重田渉
少年の磨く石塊百日紅　佐々木啄実
日盛の大河の濁りゆく音か　垂水文弥
こんなにも兄のはるけき泳ぎかな　佐々木啄実
桃の香の中にピアノの古びけり　佐々木啄実
塵取りにうつすらと水白木槿　垂水文弥
衣被或る美しき顎を思ふ　重田渉
止みてなほ傘の一団あきざくら　重田渉
冷やかやさはさはと花踏んできて　佐々木啄実
キーパーに独りの時間鳥渡る　垂水文弥
山茶花や耳鼻科の道をとうに忘れ　佐々木啄実
ラガー等のずんずん影を濃くし合ふ　佐伯冴人
東京や雨の聖樹に肩触れて　垂水文弥
踏切の向かうのポインセチアかな

15

サーカスの獅子

参加者

東風谷順正（こちや・じゅんせい、海城高等学校二年）
干川祐輝（ほしかわ・ゆうき、同二年）
滝本圭佑（たきもと・けいすけ、同二年）
東口怜弘（とうこう・さとひろ、同一年）

口紅をつけてみたしよ千歳飴　干川裕輝
抛らるる銭の気持ちも七五三　東風谷順正
氷面鏡木馬の腹の朽ちてをり　東風谷順正
汀いま平たくなれり花がるた　東口怜弘
投扇や不揃ひの歯を見せてゐる　干川裕輝
節料理ありし冷蔵庫の灯り　東口怜弘
流氷を船の破片が進みゆく　滝本圭佑
後部座席の置き去る景色山笑ふ　東風谷順正
蘖や体育館の屋根丸し　滝本圭佑
水道管工事中なり花盛り　東口怜弘
群がりの苔より漏れ出づる朧　滝本圭佑
雲に入る一羽は少し遅れゐて　東口怜弘
夏の炉の灰延々と炙らるる　滝本圭佑
鉄塔や青田真中に基礎のあり　東風谷順正
きりきりと結ぶ清しさ登山靴　滝本圭佑
石段をゆつくりおりて滝近し　干川裕輝
収穫や胡瓜の疣のはきはきと　東口怜弘
プールサイド瘡蓋の膨らんでゐる　滝本圭佑
白桃を載せゐし皿を片しけり　東口怜弘
嬰児の宙に近づく芙蓉かな　東風谷順正
月の夜のサーカスの獅子ずいと跳ぶ　滝本圭佑
黄落や石段に僧ひとり掃く　東口怜弘
掌に筋深く濃く露寒し　東口怜弘
久しぶりの雨が楽しい鯨かな　東口怜弘
鯛焼の尾鰭ばらして鳩に撒く　干川裕輝

16　祈り

参加者

小林蓮（こばやし・れん、長野清泉女学院高等学校二年）
竹内愛羽（たけうち・まなは、同二年）
荒井かな子（あらい・かなこ、同二年）
池田愛羅（いけだ・あいら、同二年）
大日向愛良（おびなた・あいら、同二年）

重なった瓦礫の中の蒲公英よ　大日向愛良
花ミモザあの日流れた船かとも　小林蓮
道端の慰霊の花の陽炎える　竹内愛羽
海温の上昇若布ざわざわと　荒井かな子
食べ残しなくす運動昭和の日　荒井かな子
風薫るマスクはずしてしまいたい　大日向愛良
ビニールの袋と海月ゆらゆらと　池田愛羅
浜木綿や鳥の死骸にプラのごみ　池田愛羅
飢餓の子の空へ国境なき虹よ　竹内愛羽
コロナウイルスうつらぬように袋掛　大日向愛良
七夕や今年はコロナ終息を　荒井かな子
わが影の壁に張りつく広島忌　池田愛羅
正義とは何か八月十五日　小林蓮
祈りとは忘れないこと終戦日　小林蓮
盂蘭盆や隣の墓は流されて　竹内愛羽
赤い羽根五百円玉惜しみなく　竹内愛羽
飢餓の子の大き眼や石榴の実　小林蓮
コロナ禍の父の出張夜の寒し　荒井かな子
アフリカの子らの死冬の白鳥座　池田愛羅
右足無き少年兵やポインセチア　小林蓮
マスクして歌うimagineクリスマス　池田愛羅
先見えぬコロナ禍の日々日記買う　小林蓮
被災地や餅搗く人の手の厚き　竹内愛羽
コロナ禍やころころ太る雪だるま　荒井かな子
復興のイルミネーション枯木立　大日向愛良

17　スカートの裾

参加者

大友結（おおとも・ゆい、星野高等学校一年）
渡部美咲（わたなべ・みさき、同一年）
小島穂乃花（こじま・ほのか、同一年）
秋池花宥（あきいけ・みひろ、同一年）

小町忌やゆびおりてよむ恋の歌　渡部美咲
スカートの裾たくしあげ磯遊び　渡部美咲
祖母の指す電話ボックス蜃気楼　大友結
背を向けしポニーテールや麗かに　秋池花宥
本棚の埃の舞いて朧月　秋池花宥
触れそうで触れられぬ指桜餅　秋池花宥
レポートにシミを作りし夏蜜柑　小島穂乃花
ジャージから覗くミサンガ南風　大友結
紫陽花や移り気な君の袖引く　渡部美咲
ケータイのＧＰＳを切りて夏　秋池花宥
悪者になりきれぬ甥サングラス　大友結
左手にモデルガン持つ浴衣かな　小島穂乃花
キャラメルを二つ握りて墓参　大友結
鳴き声の消えし犬小屋曼珠沙華　大友結
テーブルの離婚届や秋の夜　秋池花宥
一筋の涙の如く流れ星　小島穂乃花
秋澄むやサイドミラーに富士の山　大友結
秋高し君と合はするチューニング　小島穂乃花
寒茜一番星を指にのせ　小島穂乃花
注射器に溜まりゆく赤ポインセチア　大友結
白息を煙草に見立て笑ふ鼻　渡部美咲
言い訳をする君の目や雪兎　秋池花宥
操舵手の缶コーヒーや初茜　大友結
愛猫の腰丸まりて宵の年　秋池花宥
初電車いまだに声をかけられず　渡部美咲

18

季節のパレット

参加者

吉沼賢人（よしぬま・けんと、文教大学付属高等学校二年）
常岡陸（つねおか・りく、同二年）
野口蒼太（のぐち・そうた、同二年）
阿部杏香（あべ・きょうか、同二年）
片野和香（かたの・ほのか、同二年）
権守真菜（ごんもり・まな、同二年）

残雪の大地に芽吹くあやめの花　片野和香
色彩の光輝く花火音　阿部杏香
紅葉を見ないうちに木は落葉　権守真菜
白銀に埋もれ消えゆくあの花も　吉沼賢
春になり鼻はむずむず赤くなる　権守真菜
海だ海パンダ模様で最強だ　野口蒼太
黒の中黄金に光る秋の月　吉沼賢人
冬の空きらめく星空指でなぞる　常岡陸
桜の葉刹那で咲いて散ってゆく　野口蒼太
貝拾い手の中の砂先の群青　片野和香
華奢な娘が木漏れ日受けて照らされる　野口蒼太
初氷茶の深靴に雨しずく　片野和香
新鮮のひらひら桜春の風　阿部杏香
水の音気持ちさわやか一滴の　阿部杏香
秋の色着込む人々裸の木　常岡陸
新雪に寝る芽キャベツ冬の朝　常岡陸
青空に浮かぶ峰雲雪のよう　吉沼賢人
真っ白な入道雲に手を伸ばす　権守真菜
夏休み冷やした部屋で毛布にくるまる　常岡陸
葉の色紅葉美しく秋探し　阿部杏香
金の香の有明の月秋惜しむ　片野和香
冬の空夕日の沈む時の流れ　阿部杏香
外見ると白いセーター揺れている　権守真菜
寒気の日おでんつんつん楽しいな　常岡陸
雪の下いつまでも待ついつまでも　野口蒼太

19　単線の街

参加者

網谷菜桜（あみたに・なお、高田高等学校二年）
松本大輝（まつもと・たいき、灘高等学校三年）
八木大和（やぎ・やまと、愛媛県立今治西高等学校三年）
藤井万里（ふじい・ばんり、立教池袋高等学校二年）
申千春（しん・ちはる、智辯学園和歌山高等学校）

荷物みな身を締めつけて蝌蚪生まる　松本大輝
ため息のつめたさに似て石鹸玉　網谷菜桜
クリックの間隔あいて百千鳥　申千春
ちちははの喧騒遠く菫草　八木大和
猫がゐるくらさの蜆汁であり　藤井万里
朧月人権作文書き直す　申千春
謝れば済むこと多し胡瓜揉　八木大和
鈴蘭に小指の先の触れてゐる　申千春
噴水の穴ももいろに錆びてをり　藤井万里
炎天や老人の持つ拡声器　松本大輝
くるぶしの常なる遠さ甲虫　藤井万里
カンバスの夕虹いつぱいに湛へ　網谷菜桜
肖像の蓄へし髭芭蕉の葉　松本大輝
聖みな目を瞑りたる大花野　八木大和
家庭科の班決め終へて野分雲　申千春
ミスド買ふ父の背中や星流る　申千春
ゆつくりと一人になつてゆく秋刀魚　藤井万里
秋深しキーホルダーの煤けをり　松本大輝
じくじくとひらく切り傷冬の朝　八木大和
水鳥の水に疲れてゐるかたち　藤井万里
冬の星踏切渡り損ねけり　八木大和
一輪車とほれるほどに葡萄枯る　藤井万里
焼芋のしづかな方をもらひたき　藤井万里
冬銀河以外に何もない故郷　網谷菜桜
単線の街を風花蹂躙す　網谷菜桜

20 「そこにあったんだ。」

参加者

廣田夏海（ひろた・なつみ、文教大学付属高等学校二年）
菅原光一（すがわら・こういち、同二年）
山﨑陽向（やまさき・ひなた、同二年）
青木美佑（あおき・みゆ、同二年）
中島陽菜（なかしま・ひな、同二年）
林田夏鈴（はやしだ・かりん、同二年）

雪溶けてあなたと私サクラ咲く　林田夏鈴
書店にて光る相棒発掘だ　青木美佑
春の朝雲ない空に雲探す　青木美佑
友人と逸話りばかり桜並み　山﨑陽向
一目見て恋に落ちたの春一番　林田夏鈴
朝早く目覚まし時計せみの声　中島陽菜
見上げればひまわりの咲く宵の空　山﨑陽向
新緑に吸い込まれたい炎天下　廣田夏海
かき氷君に夢中で淡い水　青木美佑
大花火私の心に火をつけた　廣田夏海
夏の星私のスターどこかしら　青木美佑
夏の果て課題片手に反省だ　青木美佑
門を出て空の色見て気づく秋　廣田夏海
化粧したもみじのはっぱはかめれおん　中島陽菜
フウがわりカボチャもフラうオカシな日　山﨑陽向
愛しいとラブを届ける天の川　菅原光一
祖の帰り悲願に思う彼岸花　山﨑陽向
餅つかず遊ぶウサギと星月夜　林田夏鈴
単語帳手袋でめくれない　青木美佑
一時の我慢やマスク一年に　林田夏鈴
外を見て布団が恋しい冬の朝　廣田夏海
おかえりと待ちくたびれた雪だるま　山﨑陽向
チョコっとの　コーイ意識の俺持つよ　山﨑陽向
吐く息が白いため息受験生　青木美佑
夜食取りもうひと踏ん張り春隣　林田夏鈴

21　とりあえず

参加者

田中望結（たなか・みゆ、星野高等学校二年）
東風平梨緒（こちだいら・りお、同二年）
村田陽代莉（むらた・ひより、同二年）
延島永都美（のぶしま・なつみ、同二年）
宗村都央（むねむら・みお、同二年）

満天星の花ぞ教会灯りける　田中望結
春一番郵政カブのクラクション　宗村都央
蒲公英を摘みまた摘みて仲直り　村田陽代莉
好きなのといってしまつたしゃぼん玉　延島永都美
花冷えの少女の失恋歌の巡る　宗村都央
腕時計直す祖父の手山笑ふ　東風平梨緒
向日葵ちりぢり　絶交の便り　村田陽代莉
八月の空いつまでも爆心地　東風平梨緒
額の花落ちて子役の声変はる　宗村都央
キャラバンの助手席夏の星静か　東風平梨緒
観音の手を零れたる旱星　田中望結
改札に更新の指示秋の暮　延島永都美
フラスコに閉じ込められし秋の月　村田陽代莉
名を知らぬ町の神社や星流る　村田陽代莉
三日月の映りし窓の菓子司　東風平梨
虫の声造花の鋭きに止まる　村田陽代莉
朝寒や煙草の匂ひの残る路地　田中望結
銅像の脚滑らかや冬薔薇　田中望結
ともくんと呼んでみるなり冬銀河　延島永都美
バッティングセンター凍星撃ち落とす　田中望結
年惜しむアロマに詳しくなりし母　延島永都美
とりあえず未来の話して雑煮　田中望結
年賀状お元気ですかが十五枚　宗村都央
をの音を強調したる歌加留多　延島永都美
初茜猫の眠れる定食屋　東風平梨緒

22　極月

参加者

森勇人（もり・はやと、愛知県立岡崎東高等学校二年）
夏目丈（なつめ・じょう、同二年）
鈴木空（すずき・そら、同二年）
田外美緒（たのそと・みお、同二年）

初霜やリードの弛む田舎道　夏目丈
牧場に座りて冬晴を撮りぬ　鈴木空
乳牛の背のまんまるし冬日和　森勇人
落葉焚畑に垂直なシャベル　森勇人
室外機どろろと回る開戦日　森勇人
冬の月雲の切れ目を探しけり　田外美緒
湯たんぽや腹のボタンをはめなおす　夏目丈
紙袋撫づれば鯛焼の鱗　鈴木空
侘助や信号待ちに袖伸ばす　夏目丈
通学の傘重くする霙かな　田外美緒
城跡に立つや数多の屋根へ雪　田外美緒
じゃんけんをして皹割れの痛さかな　鈴木空
紙懐炉母に歩調を合はせたり　森勇人
スーパーの袋に焼芋の袋　夏目丈
制服のまま飯食べて柚子湯待つ　夏目丈
柚子風呂の柚子に重力無いらしく　森勇人
反対の校門通る冬休　夏目丈
雑炊を食ひてソファーに戻りけり　鈴木空
五千円持つて一人のクリスマス　田外美緒
最終電車近し聖菓のショーケース　森勇人
数へ日の夜中にカレー作りけり　田外美緒
古日記中指の傷乾きをり　森勇人
職員用玄関狭し松飾る　森勇人
六人のキッチン狭し餅搗機　森勇人
白組の曲順調ぶ大晦日　鈴木空

23　月今宵

スキップで登校木犀の香　楊博文
頬なづる色なき風に音のあり　辻颯太郎
秋の池群がる鯉のおちょぼ口　小坂田華
鈴生りに雀のとまる遠案山子　横田晴華
彼岸花赤き糸垂れ参観日　西浦主真
放課後の校門黄落巻き上げ　横田晴華
言ひ訳をせぬ約束ぞ流れ星　楊博文
香を聞く長き静寂や菊ひらく　西浦主真
石橋を代はる代はるに秋の園　辻颯太郎
練兵場あとかたもなし祈り虫　小坂田華
名物のまがりせんべい紅葉狩　楊博文
実紫こぼるる茶屋の緋毛氈　小坂田華
指先に軌跡を残す赤とんぼ　辻颯太郎
急行の後は銀波の芒原　福田悠暁
散歩道花束にする猫じゃらし　横田晴華
繋ぐ手に力込めたり秋燕　辻颯太郎
立ち尽くす鷺の目遠し秋の水　辻颯太郎
足裏にめきりと鳴れり玄圃梨　福田悠暁
泣きさうな夕空ごと林檎かじる　横田晴華
草の絮ゆふべの風を象りて　西浦主真
椎の実の暗き水面に沈みけり　辻颯太郎
軒下の祖母の干柿粉を吹き　小坂田華
里祭り久闊叙する拳かな　楊博文
銀杏の爆ぜて始まる宵の膳　福田悠暁
赤提灯針なき時計月今宵　西浦主真

参加者

辻颯太郎（つじ・ふうたろう、岡山県立岡山朝日高等学校一年）
楊博文（よう・ひろふみ、同一年）
西浦主真（にしうら・かずま、同一年）
横田晴華（よこた・はるか、同一年）
小坂田華（おさかだ・はな、同一年）
福田悠暁（ふくだ・ゆうき、同一年）

24　地上絵

参加者

川田美紀（かわた・みき、洛南高等学校二年）
釜江康太（かまえ・こうた、同二年）
山上莉央（やまがみ・りお、同二年）
伊藤栞奈（いとう・けんな、同一年）
山本泰己（やまもと・たいき、同一年）

帰り花かつては細き母の眉　川田美紀
大陸に眠る地上絵冬銀河　川田美紀
座布団のくぼみ故郷に鋤焼す　釜江康太
軒下に舟の朽ちたる冬隣　釜江康太
冬の虹傘にほやりと透けてゐて　川田美紀
手拍子に歌の速まる寒茜　釜江康太
がりがりと味のかはらぬ千歳飴　伊藤栞奈
闇鍋の我が箸つつく先も箸　伊藤栞奈
恋文に消し跡残し冬葵　伊藤栞奈
空瓶にクミンの香る聖夜かな　川田美紀
まるまりつまたまるまりつ賀状書く　釜江康太
鐘の音を額に受くる余寒かな　川田美紀
春風の吹く方に猫鳴きにけり　伊藤栞奈
うつすらと残るチョークや雪解水　山本泰己
ひつつめの祖母とふたりや夏帽子　川田美紀
何もかもできる気がする跣かな　山本泰己
待ち合はせ場所に眺むる花火かな　川田美紀
墓前にてお経唱える渡り鳥　山本泰己
蜩や塔くつきりと影を持つ　釜江康太
芒原今朝すれ違つた人とまた　釜江康太
雲の端に光残して鳥渡る　釜江康太
学生の一列に寝る秋夕焼　釜江康太
丸椅子をふたつ机として夜長　釜江康太
竜骨に節目の残る秋思かな　釜江康太
紅葉且つ散る飴ひとつ噛み砕く　釜江康太

25　タイムラプス

参加者

加藤陽南（かとう・ひな、文教大学付属高等学校二年）
大原怜音（おおはら・れおん、同二年）
渡辺翔栄（わたなべ・しょうえい、同二年）
河合悠（かわい・ゆう、同二年）
鈴木かの子（すずき・かのこ、同二年）
藤田彩実（ふじた・あやみ、同二年）

春の風まだ冷たくて夜長い　加藤陽南
新たな眼緊張供に雪溶けよ　大原怜音
桜舞う晴れた青空友浮かぶ　渡辺翔栄
入学式友と通学凍返る　河合悠
春の日の地面をうめる桜色　藤田彩実
風吹きて散りゆく桃色木の芽出づ　鈴木かの子
空を見て満点の星夏の蚊帳　河合悠
大暑の海暑さに耐えず汗をかく　藤田彩実
いざ海へ焼けた足背白い跡　鈴木かの子
踏ん張れよポカリスエットにあと一歩　大原怜音
夏祭り浴衣で巡る夜の店　加藤陽南
秋こいと汗を拭って麺すする　渡辺翔栄
クーラーよ出来心から温暖化　大原怜音
蜩の鳴き声聞こえ振り返る　鈴木かの子
夏終わり私の心も秋の山　河合悠
橙に染まる紅葉と秋の空　藤田彩実
風誘う赤一色の秋の声　渡辺翔栄
金木犀ほのかな香り秋深し　加藤陽南
凍る体体温分け合う師走かな　加藤陽南
黒マスクもれいづる白我の息　大原怜音
大晦日ひびわたるは除夜の鐘　藤田彩実
明けましてなんたる幸せ初夢よ　河合悠
凍て晴れや口先に雲マフラーと　鈴木かの子
ペンを持ちはちまき巻いて春を待つ　渡辺翔栄
冬を脱ぎ梅の隣で春を待つ　藤田彩実

26　冬から始まる自粛生活

参加者

芳根柚子（よしね・ゆうこ、文教大学付属高等学校二年）
市村悠真（いちむら・ゆうま、同二年）
鈴木公元（すずき・きみはる、同二年）
赤岩笑理（あかいわ・えみり、同二年）
岩崎響（いわさき・ひびき、同二年）

自粛中マスク着用必需品　赤岩笑理
チョコ渡し言い渡された休校だ　岩崎響
休校でテスト勉強やらずじまい　芳根柚子
空白の自粛期間胸躍る　鈴木公元
余る時間どう過ごすかは自分次第　鈴木公元
自粛して打ち上げの予定お蔵入り　芳根柚子
勉強をやろうとしたらあそんでた　赤岩笑理
ひまなときひたすら家で寝ていたよ　赤岩笑理
家にいて初めて気づくありがたさ　鈴木公元
春休み友達恋し会いたいなあ　岩崎響
春の色見えるは窓の景色だけ　鈴木公元
自己反省生暖かい春風と　岩崎響
初めてのオンライン講座新鮮だ　赤岩笑理
春の朝起きると隣に教室が　市村悠真
新学年くらすめいとと画面越し　岩崎響
新学期リモート授業で肩が凝る　芳根柚子
外みるとピンクのロード閑散と　岩崎響
暇すぎて不思議と学校恋しくなる　芳根柚子
桜散り運動のため縄を飛ぶ　市村悠真
通学路見える桜に花はない　鈴木公元
夏場でもマスク必須で汗やまず　芳根柚子
夏休み今年の帰省はオンライン　市村悠真
暑い夏マスクで外には出たくない　市村悠真
残暑なく新たな気持ちで外に出る　市村悠真
コロナより旅行キャンセルつらすぎる　赤岩笑理

27　空模様

参加者

伯耆夏希（ほうき・なつき、文教大学付属高等学校二年）
川端雅輝（かわばた・まさき、同二年）
藤井春希（ふじい・はるき、同二年）
大久保綾音（おおくぼ・あやね、同二年）
草間春花（くさま・はるか、同二年）
吉田優那（よしだ・ゆうな、同二年）

雪だるま作りたいけど雪降らず　吉田優那
電灯の細き光と冬の雨　吉田優那
オリオン座浮かぶ夜空に白い息　吉田優那
通学の途中見かけた霜柱　吉田優那
冬の雷空を切り裂き耳ふさぐ　草間春花
日が昇る雪解け水と乾く空　草間春花
曇り空より暗くなる長い夜　草間春花
通学路服の上咲く六つの花　草間春花
春日和小鳥のさえずりほほえまし　大久保綾音
空模様苺ミルクの連想か　大久保綾音
三日月の満つるを待ちてススキ取り　大久保綾音
今年の世自粛と三密年惜しむ　大久保綾音
桜道太陽照らす新学期　川端雅輝
太陽が顔を隠す梅雨の時期　川端雅輝
鰯雲紅葉主演脇役だ　川端雅輝
雪積りイルミネーション幻想だ　川端雅輝
雨降った蛙が飛び出し歌ってる　伯耆夏希
天気雨予報でたらめやめちまえ　伯耆夏希
雨の日だ部活休みだ感激だ　伯耆夏希
快晴だ洋服乾くのど乾く　伯耆夏希
雨続き梅雨前線早く去れ　藤井春希
並木道黄色に染まるくさいみち　藤井春希
落ちゆく葉恋しく思う家の風呂　藤井春希
またたくま気温差によりしろめがね　藤井春希
じりじりと寝かせてくれよアブラゼミ　藤井春希

28

ハチ公前の怪獣

参加者

小野寺睦月（おのでら・むつき、星野高等学校一年）
栃木勇芽（とちぎ・ゆうが、同一年）
三上颯人（みかみ・はやと、同一年）
大谷友也（おおたに・とも や、同一年）

まどりみて怪獣叫ぶ夏の雲　大谷友也
路地裏にビー玉落とす冬の星　大谷友也
榛摺のポニーテールの踊る夏　小野寺睦月
竹の秋背比べしたる通学路　小野寺睦月
夏暁やこれやこれやとカラス鳴く　三上颯人
弟の西瓜先端ひとかじり　栃木勇芽
踊り子の輪に混じりたる小鳥かな　小野寺睦月
天楽の響く夜空や秋祭　栃木勇芽
十六夜の月に絵馬書く古社　栃木勇芽
排気ガス沈む夜道や火の恋し　栃木勇芽
ゴンドラの影遠ざかる秋の山　大谷友也
渡り鳥のような彼を待っている　大谷友也
ミルクパズル解く蝋燭のクリスマス　栃木勇芽
聖夜祭既読のつかぬハチ公前　小野寺睦月
深更に傷心の癒ゆ虫の声　小野寺睦月
蟬時雨従弟の持てるショート傘　小野寺睦月
親性を海とも言へり竜の玉　栃木勇芽
狛犬の頭に届く宵の年　三上颯人
海霧や空を飲み込む放行鳩　三上颯人
焚火して闇に溶けゆく日曜日　大谷友也
セーターの袖をまくりて空返事　大谷友也
翔け昇る鶴を見送る入り日かな　大谷友也
不明者の市内放送山眠る　小野寺睦月
すれ違う人人人や隙間風　大谷友也
スクランブル交差点片手袋を探したる　三上颯人

29 冬

雪が散る一緒にいるとなんかChill　高橋大
白い雪積もればまるで広い海　井之上光希
冬来てもボードゲームで凍えぬ手　横山英汰
澄んだ朝開けた窓に見る結露　保坂美咲
冬の森ふたたびみたいむささびを　小林正樹
ホッカイロあの子のぬくもり御来光　高橋大
冬の夜愛するあなたへプロポーズ　井之上光希
ゆきとけて頭角現わせ休み明け　横山英汰
荷をとって駆けだす朝に白い息　保坂美咲
鍋囲むほっとひと息冬の夜　小林正樹
冬の風ちくりと刺さる心地良さ　高橋大
冬籠り起きろ起きろと母が言う　井之上光希
人想い凍える夜の心の灯　横山英汰
とろーりと湯気までおいしいシチューかな　保坂美咲
クリスマスお前に会って想い言ふ　小林正樹
ホッカイロポケットの中のぬくもりかな　高橋大
スキー場そこでは自分が主人公　井之上光希
お年玉欲しい思いの抑え方　横山英汰
マスク越し吐き出す息の清き白　保坂美咲
散歩中風で感じる冬来たり　小林正樹
マフラーを巻いたあの日はクリスマス　高橋大
冬空に出ては消える白い息　井之上光希
またあした会えなく溢れるみぞれかな　横山英汰
パチッとねふれる前なのドキドキ感　保坂美咲
大晦日こたつで一人みかんむく　小林正樹

参加者

高橋大（たかはし・まさる、文教大学付属高等学校二年）
井之上光希（いのうえ・こうき、同二年）
横山英汰（よこやま・えいた、同二年）
小林正樹（こばやし・まさき、同二年）
保坂美咲（ほさか・みさき、同二年）

30　今日一の行事

参加者

中根冒野児（なかね・ぼやじ、文教大学付属高等学校二年）
小俣雄将（おまた・かつまさ、同二年）
小泉優也（こいずみ・ゆうや、同二年）
篠宮千明（しのみや・ちあき、同二年）
古川愛美（ふるかわ・まなみ、同二年）
高岡美咲（たかおか・みさき、同二年）

春だから我の心は主観色　中根冒野児
体育祭昼も終わると雲形定規　中根冒野児
春愁や出会いと別れ繰り返す　古川愛美
こみ上げた思いを胸にまた来年　古川愛美
謬見も君の前なら自己主張　中根冒野児
不安心希望に満ちる入学始　小泉優也
朝合唱冷ややかな風に乗りながら　小泉優也
桜散る静まる教室最後の日　小泉優也
桜咲きぬれる頬と薫る思ひで　篠宮千明
桜ふる高鳴る心臓巡り合う　篠宮千明
奏であう気持ちのメロディー心のベース　篠宮千明
世界一友と努めた集大成　篠宮千明
青天下届ける声援応える英雄　篠宮千明
桜咲くはじめの一歩登校日　高岡美咲
袖通す腕がひんやり衣替え　高岡美咲
さむくても心は熱いさあ歌おう　高岡美咲
水着着るわき出る思いああいやだ　高岡美咲
水に触れ気持ち高ぶるもぐりたい　高岡美咲
体育祭眩しい日差しが目に入る　小俣雄将
文化祭一番楽しい準備期間　小俣雄将
時進み並ぶ建物変わってく　小俣雄将
合唱の重なる声色響かせる　小俣雄将
なにげない日々の日常大切に　古川愛美
はじめての仲間とともに達成感　古川愛美
帰り道はしゃぐ子どもら懐かしむ　古川愛美

31　飛べぬ羽

参加者

中川収三（なかがわ・しゅうぞう、開成高校学校一年）
荒川力也（あらかわ・りきや、同一年）
根木波輝（ねぎ・なみき、同一年）
鈴木ヒロアキ（すずき・ひろあき、同一年）
佐藤颯（さとう・かける、同一年）
山崎勇獅（やまざき・ゆうし、同一年）

袂より風の生まるる流灯会　山崎勇獅
かなかなの夕日にしがみつく声か　中川収三
木がいっぽん伐られてゐたり休暇明　佐藤颯
上向きの蛇口いくつか小鳥来る　根木波輝
陸に置く舟あたたかし草の花　荒川力也
無患子のつぶさに落ちる夕かな　山崎勇獅
穐田の光より鳥生まれけり　荒川力也
祖母の家に裏口二つ枇杷の花　荒川力也
水鳥や革ジャンパーの艶とほし　荒川力也
山茶花はむかしがたりのやうに散る　根木波輝
家ぢゆうの花に倦みけりカーペット　根木波輝
真白き陽かれあしはらの上澄みに　山崎勇獅
鴨鳴けば曙杉の降りしきる　中川収三
スケーター腕は飛べぬ羽として　鈴木ヒロアキ

【既発表句】

耳打ちのしづけさに揺れ雪柳　佐藤颯
遅き日やはつかに濁るレモンティー　山崎勇獅
小児科に天使の時計春休　荒川力也
野遊や真白きものは飛びやすき　根木波輝
図書館に自転車二台かたつむり　鈴木ヒロアキ
死火山の麓の平家蛍かな　佐藤颯
青嵐牛の乳房のどつさりと　佐藤颯
旅行記を書けさう蟻に囲まれて　中川収三
東京を隠す雨なり冷奴　荒川力也
夏の蝶あるいは碧き葉の過ぎて　中川収三